

幼児を対象とした造形表現の研究

— 廃材を用いた親子の遊びにつながる製作と造形遊びの実践より —

Research on Modeling Children Expressions

— A case study of child and parent's play models —

次世代教育学部こども発達学科

後藤 由佳

GOTO, Yuka

Department of Early Childhood Development

Faculty of Education for Future Generations

次世代教育学部こども発達学科

梶原 千鶴

KAJIWARA, Chizuru

Department of Early Childhood Development

Faculty of Education for Future Generations

次世代教育学部こども発達学科

副島 好華

SOEJIMA, Konoka

Department of Early Childhood Development

Faculty of Education for Future Generations

次世代教育学部こども発達学科

入江 美帆

IRIE, Miho

Department of Early Childhood Development

Faculty of Education for Future Generations

次世代教育学部こども発達学科

米田 詩穂

YONEDA, Shiho

Department of Early Childhood Development

Faculty of Education for Future Generations

要旨：本研究の目的は、子育て支援活動を通して、製作と造形遊びに着目し、身近なもの、廃材を用いた家庭での親子の遊びにつながる造形表現とはどのようなものであるか、明らかにすることである。

これまでの学生たちの気づきや問いから、終わりの見えないコロナウイルス感染拡大のため、外出を控え、家庭で過ごさざるを得ない子どもや子育て家庭に対して、本学の学生とともに、領域「表現」の視点から、新たな取り組みができるのではないかと考え、実践研究を行うことにした。「親子で遊ぼうin IPU～夏祭り編～」は、本学第1キャンパスにて令和3年7月22日、幼児と保護者を対象に造形表現の活動を中心に実施した。本稿は、筆者らが実施した子育て支援活動を通して、製作と造形遊びに着目し、廃材を用いた親子の遊びにつながる幼児の造形表現について報告する。

キーワード：保育内容（造形表現）、保育教材、製作、親子遊び、子育て支援

Keywords：Children expression, Educational material, Artistic play activities, Parents and child's play activities, Childcare support

I. 研究の背景と目的

世界的に感染が広がる新型コロナウイルスのため、2019年4月、緊急事態宣言が日本全国に拡大され、各地で幼稚園・保育所から大学まで休園・休校が続い

た。感染拡大防止のため、不要不急の外出や移動の自粛が要請された。人々は外出を控え、自宅で過ごす時間が増えた。それは幼稚園や保育所等に通う子どもたちも同様、自宅で過ごす時間が増え、休園・休校の延長に伴い、子どもと保護者の距離が物理的に以前より

も近くなった。

そのような中、今、泣きやまない子どもや忙しい時にスマートフォンやタブレットを与える「スマホ育児」が問題となっている。実際、幼児期の子どもが親戚にいる学生も、親戚の子どもと過ごす中で、大人がスマホやタブレットについつい頼ってしまっていることを指摘していた。このような学生の気づきや問いから、終わりの見えないコロナウイルス感染拡大のため、外出を控え、家庭で過ごさざるを得ない子どもや子育て家庭に対して、本学の学生とともに、領域「表現」の視点から、新たな取り組みができるのではないかと考え、実践研究を行うことにした。

岡山県では大学等有する知的資源、人的資源やそのネットワーク、施設等を活用して行う、協働による地域ぐるみの子育て支援の取組を「おかやま子育てカレッジ」に指定し、その活動を促進する事業を行っている。本学の「子育て支援プロジェクト・IPU」も、平成21年7月より実行委員会として「おかやま子育てカレッジ」の指定を受け、本学の特徴を生かした活動を展開してきた。今年度は、社会情勢を鑑みて、ゼミナールにて幼児のみを対象とした、地域限定の少人数制の子育て支援を企画した。

本研究では、子育て支援を通して、製作と造形遊びに着目し、身近なもの、廃材を用いた家庭での親子の遊びにつながる造形表現とはどのようなものであるか、明らかにすることを目的とする。

II. 研究の方法

本研究の目的を踏まえて、令和3年7月22日（木・祝）にはゼミ企画の子育て支援「親子で遊ぼう in IPU～夏祭り編～」として、幼児と保護者を対象に造形活動を行った。

イベント名：親子で遊ぼう in IPU～夏祭り編～
（授業「ゼミナールⅡ」にて企画した子育て支援活動）

日 程：令和3年7月22日（木・祝）10:00～11:30

場 所：環太平洋大学第1キャンパス

教育棟2階 図画工作室 講義室5

企画者：大学生16人（3年生11人、4年生5人）

教員1人

参加者：親子6組（子ども10人、保護者9人）

開催時期が夏であったが、コロナ禍の影響で地域活

動（イベント）等の中止や延期となる中、子育て家庭に楽しんでもらえるようイベント名を「親子で遊ぼう in IPU～夏祭り編～」にした。時間は朝10時から11時半までの1時間半、場所は本学第1キャンパス教育棟2階図画工作室と講義室5との2教室で実施した。幼児を対象とし、定員は親子8組、地域限定の少人数制で、親子の遊びにつながる造形活動を行った。活動内容は、製作をストロー花火と浮沈子、造形遊びを輪投げと魚釣りにした。製作グループ（ストロー花火、浮沈子）と造形遊びグループ（輪投げ、魚釣り）に分けて、親子で遊ぶ子どもの姿を観察し、実践後は参加の保護者に対してアンケート調査と聞き取り調査を実施した。

III. 研究の結果

1. 製作と造形遊びの実践

開催時間になったら学生は子どもたちにイベントではどのような造形表現の遊びをするのかを伝え、保護者にも子育て支援活動の流れを分かるように伝えた。はじめの挨拶の後、2グループに子どもを分け、ストロー花火と浮沈子の製作を行ってから、輪投げと魚釣りの造形遊びに移動を促した。親子の遊びにつながる造形表現をテーマにした企画のため、製作の説明後は親子間で楽しめることを心掛けて声かけを行った。

（1）ストロー花火

準備物：ストロー、紙皿、絵の具、画用紙

ストロースタンプで花火を描く製作では、ストローの片方をタコ足のようにハサミで切り込みを入れ、ひらき、ストローに絵の具をたっぷりつけ画用紙にスタンプをする。子どもの好きな色を思い思いにスタンプし、自分なりの花火を表現する。あらかじめ準備していなかった色は、その場で学生が絵の具を混色して用意し、子どもがわくわくする花火を表現できるよう支援した。絵の具にはじめて触れる子どもなど、造形表現のこれまでの経験も様々であり、感じたことや考えたことを、保護者とともにのびのびと表現することを心掛けた。大人が子どもに求める完璧な作品作りをするのではなく、子どもたちが自由に描いたり、作ったりすることを楽しめるよう、親子の活動を見守り、援助を少し行うのが良いと感じた。



写真1 ストロー花火の製作（出典：後藤ゼミ）

(2) 浮沈子

準備物：ペットボトル、透明ファイル、ストロー、クリップ、シール、油性ペン

浮沈子は、容器（ペットボトル）を手で力を入れて押したり、力を緩めたりすることで、容器の中にある重りが浮いたり沈んだりする、圧力と浮力の関係を活用した玩具である。子どもは、透明ファイルをペットボトルの飲み口サイズ（直径28mm）に切ったものに、シールを貼ったり絵を描いたりして、容器の中の重りを作り、ペットボトルの側面に油性ペン等で装飾をする。自分の好きなものをペットボトルに描くことができ、楽しそうな姿も多く見られた。完成した浮沈子で遊んでいる姿を見ると、容器が想定よりも硬い種類があり、子どもが力を入れて押すには難しいペットボトルもあった。事前の教材研究で想定していたが予想以上であり、教材研究の重要性をより一層感じた。



写真2 親子で浮沈子の製作を楽しむ姿（出典：後藤ゼミ）

(3) 輪投げ

準備物：お菓子の空き箱、ペットボトル、新聞紙、段ボール、画用紙、絵の具、セロハンテープ、

ビニールテープ、ペン

輪投げは、空き箱の的を2か所、得点の付いたペットボトルの的を1か所、計3か所の輪投げのブースに分け、参加者が密集・密接を避けるよう環境構成の工夫をした。身近な廃材であるお菓子の空き箱やペットボトル、新聞紙等を学生同士で協力して収集し、あらかじめ学生が輪投げ作りをした。輪投げの輪は、新聞紙を端から棒状に丸め、巻き終わったら新聞紙を輪の形にし、端と端をセロハンテープで留め、輪をビニールテープで巻きつけた。ペットボトルの的は移動可能であるため、子どもや保護者とコミュニケーションをとりながら、一人一人に応じて的の位置を移動することで、より楽しんでいる姿が見られた。身近なお菓子の箱や得点を用いたことにより、子どもの興味を伸ばすことができた。輪を投げて遊ぶため、参加者同士の距離をしっかりと確認することが大切だと感じた。



写真3 ペットボトルの輪投げ（出典：後藤ゼミ）

(4) 魚釣り

準備物：段ボール、紐、ペン、新聞紙、テープ、磁石、ビニールシート

魚釣りでは、子どもたちが魚の名前をよく知っていることもあり盛り上がっていた。輪投げと同様、あらかじめ学生が魚釣りを作った。コミュニケーションをとりながら、魚に興味や関心を深めたようであった。魚は切り身で泳いでいると思っている子どもがいると聞いたことがあり、よい体験だと考える。魚釣り遊びは、竿の長さや魚の大きさ、釣り竿の磁石等、より楽しめるように工夫した。



写真4 ビニールシートに浮かぶ段ボールの魚釣り
(出典：後藤ゼミ)

2. 保護者のアンケート

実践後、お帰りの際に参加の保護者に、廃材を用いた造形表現についてアンケート調査を行った。結果は以下のとおりである。

【ご自宅で身近な廃材を使った製作をされますか】

- ・(家庭で廃材を使った製作は) していません。
- ・ままごとの食材や食器。
- ・新聞紙や広告などを細かくちぎり、バラまいて遊ぶ。
- ・ペットボトル、ラップの芯など。
- ・段ボールでいろいろ作りたがります。

【製作遊びで気が付かれた点をお教えてください】

- ・ こういった製作遊びの機会をもっと与えるべきだと感じました。
- ・ 絵の具を使ったのが初めてだったので、楽しそうでした。家でも工夫して遊ぼうと思います。
- ・ 子どもには(浮沈子の)ペットボトルを押す力が弱く、少し難しかったようでした。
- ・ 魚釣り(造形遊び)の釣り糸が少し長く感じました。
- ・ 楽しく遊べました。ありがとうございました。

IV. まとめと考察

「親子で遊ぼう in IPU～夏祭り編～」の終わり、挨拶の際に、参加の子どもたちにイベントの感想を聞くと「楽しかった」「またしたい」という声が上がった。企画・実践した学生たちは、子どもの声を聴き、イベントが成功したという安心感や満足感、達成感を得ることができた。



写真5 「親子で遊ぼう in IPU～夏祭り編～」企画学生
(出典：後藤ゼミ)

イベント開催の一週間後に実施した聞き取り調査では、「帰宅後、作品(ストロー花火)を冷蔵庫に飾っている。作品やイベントを振り返り、親子間のコミュニケーションの機会となっている」「作品(浮沈子)を持ち帰ったが、数日後に浮沈子のクリップ(鉄)が錆びたため、ペットボトルの中からクリップを外し、ビーズに交換して遊んでいる」等の意見があった。聞き取り調査から、子どもは自分が作ったものに興味や関心を持ち、製作した作品の中身を変えるとといったように、家庭で遊びを発展させていっていることが分かった。子どもたちは、保護者とともに自分が作ったものに親しみを持ち、輪投げや魚釣りの造形遊びより、ストロー花火や浮沈子の製作のほうが、興味や関心をより持ち続けていることが分かった。

本研究の目的は、製作と造形遊びに着目し、身近な物を用いた家庭での親子の遊びにつながる造形表現について明らかにすることである。アンケートや聞き取り調査からも、子育て支援を通して、身近なもの、廃材を用いた家庭で手軽に実践できる楽しい遊びを提供することは達成できたと考える。大学での子育て支援が、家庭での遊びのきっかけを作り、親子が共同して楽しめる遊びを提供する意義を感じた。家庭での親子の遊びを提供し、親子間のコミュニケーションを深める機会となったと考えられる。保育者らにとっても、紙コップや紙皿を使って子どもにおもちゃ制作をさせることはあっても、廃材と廃材を組み合わせる制作させる経験はないと述べている(中島 2020)。家庭で身近なもの、手軽に手に入る廃材を用いて製作をすることは、家庭での親子の遊びにつながる。親子のコミュニケーションを通して、製作の創意工夫をすることで、さらに子どもの遊びが発展し、展開していくと考える。

今日の新たな状況をたどり、造形表現の可能性につ

いて検討していきたい。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、多くの方に貴重なご教示とご協力をいただきました。お礼を申し上げます。学生の皆さんとは、この約2年間コロナ禍にもかかわらず、ゼミを通して美術活動、子育て支援活動、研究活動を行うことができました。ゼミ生の皆さんと有意義なIPU生活を共に送りましたことを、深く感謝いたします。

参考・引用文献

- 1) 後藤由佳・神谷匠海・中村大河・藤原亮大・十河秋帆・脇田清加 (2021), 「コロナ禍における子育て支援の研究－幼稚園教諭養成課程の領域『表現』に関する取り組み－」環太平洋大学研究紀要第18号, pp.239-242
- 2) 中島法晃 (2020), 「造形指導に不安を抱える保育者にとって有効な表現素材と活用のあり方～保育者研修会のワークショップ事例を通して～」岐阜女子大学紀要第49号, pp.59-65
- 3) 副島好華・梶原千鶴・入江美帆・米田詩穂 (2021), 「領域表現における身近なものの子育て支援についての研究～廃材を用いた親子での遊びにつながる製作活動の事例より～」第62回中・四国保育学生研究大会 (Web開催) 発表要旨
- 4) 牛丸和人 (2020), 「親子間のコミュニケーションを振り返る造形遊びの実践－折り紙による切り貼り遊びを通して－」西九州大学短期大学部紀要第50巻, pp.31-35
- 5) 文部科学省 (2017), 幼稚園教育要領, フレーベル館
- 6) 厚生労働省 (2017), 保育所保育指針, フレーベル館
- 7) 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2017), 幼保連携認定こども園教育・保育要領, フレーベル館

本研究は、令和3年度岡山県備前県民局おかやま子育てカレッジ地域貢献事業費の助成を受けたものである。また掲載している写真の公表については、企画学生らの同意を得たものである。